

掛川市・大東町・大須賀町 合併シンポジウム
「 1 市 2 町の融和と発展に向けて 」

掛川会場 議事録

と き 平成15年 7 月26日（土）午後 7 時から 9 時
ところ 掛川市生涯学習センター

プログラム

- 1 開 会
- 2 会長あいさつ
- 3 基調講演 「市町村合併とまちづくり」
講師 静岡大学人文学部教授 小櫻義明氏
- 4 パネルディスカッション 「1 市 2 町の融和と発展に向けて」
コーディネーター 小櫻義明教授
パネラー 榛村純一 掛川市長
大倉重信 大東町長
伊藤徳之 大須賀町長
- 5 質疑応答
- 6 閉 会

1 開会

- 司会 皆様、大変長らくお待たせをいたしました。本日はお忙しい中、また大変暑い中ご来場くださいます、誠にありがとうございます。

それでは、ただ今から掛川市・大東町・大須賀町任意合併協議会主催の合併シンポジウム「1市2町の融和と発展に向けて」を開催いたします。どうか最後までお付き合いくださいますよう、よろしくお願いいたします。

2 会長あいさつ

それでは、初めに掛川市・大東町・大須賀町任意合併協議会会長であります様村純一掛川市長より、開催地の市長でもありますので、ごあいさつを申し上げたいと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

- 掛川市長 皆様こんばんは。お忙しいところ、また晩のひと時をわざわざお見えいただきましてありがとうございます。

このシンポジウムは、市町村合併について担当する1市2町の首長が、それと学識経験者としての静岡大学の小櫻先生と4人が、皆さんの前でいろいろ皆さんとともに合併のことを語り合う、話し合う、そういう公開の場の初めての試みであります。皆様方にも新聞記事等でいろいろご心配をおかけしていると思いますが、今日はそういうことについて確認したり、今後の課題をはっきり持っていたいて、この合併運動が平成17年の3月までに決着をきちんと市町村で決議すると、こういう段階にいくように、皆さんも今日から合併の話の観察者ではなくて参加者と、あるいは当事者という気持ちになるように、十分ご協議に参加していただきたいと、このように思います。

そういう立場で、私は1市2町の任意協議会が出来ました時に皆様方から会長を仰せつかりましたので、今日この与えられた8分の時間に会長としてのあいさつと、それから地元の市長としてのあいさつと二つ合わせて8分でやるということになっておりますが。これが大須賀町へ行きますと、今度は大須賀町長さんが地元の町長のあいさつをする、私は会長のあいさつ、大東へ行ってもそう。3か所でやることになりますので、出来れば掛川の方も時間があれば大須賀の会場や大東の会場にも行っていただくと、三つの会場の雰囲気なり、やりとりがよりわかるということもありますので、またそういう時間が割けられたら、よろしくお願いいたします。

それで合併については後、小櫻先生からいろいろお話があると思いますので重複を避けたいと思いますが、皆さんに今日お配りした資料の中で、1市2町がもしまとまって合併にいったとしたら。こういう資料がございますけれども。本当は、私は今でも1市4町小笠郡。浜岡は原子力発電のことがあるので特区としてやむを得ないにしても、あとの1市4町は一つになるべくやるということ、一

縷の望みを私は今でも持っております。

小笠郡は昭和28年までは4町31村で成り立っていたんですね。4町31村というのは掛川町と堀之内町と、それから池新田町と横須賀町と4町31村だったんですが。それが昭和29年から昭和35年にかけて合併して1市5町になりました。その1市5町が更に浜岡が抜けて4町になって、更に菊川・小笠が別にやりたいということになると、この1市2町だけになるということで、明治22年の形から明治の大合併、昭和の大合併、平成の大合併と、こういう四つの図式になっておりますので、これを頭に置いてお願いしたいと思います。

平成11年に合併の話がこれから起こってくるぞということを察知いたしましたので、私は大井川から天竜川までが一つにまとまって浜松・静岡に匹敵する50万都市をつくったらどうだということで、3市13町1村を全部回って分権行革広域調査会というのを立ち上げました。それで、いろいろ協議をしましたが、結局いろいろな条件がかみ合わなくて、市町村長さんや議員さんの枠組み論から入っちゃって、医療や病院経営をどうするかとかいろいろな生活の問題から入らなかったもので、財政・行政枠組みから入っちゃったものですから、やや空回りした点もありまして、結局平成11年の3市13町1村という中東遠は五つに分かれることになりつつあります。

それは磐田市を中心としたもの、それから袋井市を中心としたもの、それから今日お集まりの1市2町、そして菊川・小笠、そして浜岡・御前崎と、こういうことに大きな地域が短冊形に五つになってしまうんですね。そういうことがいいか悪いかは、これはまだ経ってみないとわかりませんが、そういうことを含めて今日の議論で深めていただいて、任意協議会が出来ましてもう3回開いたんですね。菊川・小笠の方は任意協議会をもう8回も開いたと、こういうわけであります。

今、掛川・大東・大須賀の任意協議会は3回開きまして、3回で決めたことは三つあります。一つは、この合併は吸収合併ではない、新設・対等合併であると。これが第1条。それから第2条は、事務所の位置はこれはいろいろな条件や広さからいってやむを得ないけれども、掛川市役所を本所として、今の大東、大須賀の市役所を支所として事務所の位置を決めると、これが二つ目。それから、三つ目は新市の名前ですね、名前は公募でいくと。ですから、1人1票ということで皆さんもぜひ公募をしていただきたいと思うんですね。

もしかしたら、大須賀町の方は横須賀がいいと投票するかも知れない。大東町の方はまた昔の名前で城東村がいいという人もあるかも知れない。城東がいいかも知れない。あるいは、大浜がいいというかも知れない。掛川の方は掛川というかも知れない。しかし、地名にこだわらないで全く新しいビジョンとして新しい名前はないかと。人の名前、地名の名前で、一番大きな名前を付けたのは誰かご存じでしょうか。これは弘法大師の空海です。空海は空と海という名前を付けたんですね。これは一番大きい名前です。そういうようにビジョンとして、もし2

市6町が一緒になっていけば、知事がおっしゃったようにエコパ市という名前がいいだろうなと思ったんですけれども、まさかこの1市2町だけでエコパ市と付けるわけにはいかんと思うんですね。ぜひ皆さん、名前の問題は公募になっていますので、これから大いに投票していただきたいと、このように思うわけであります。

今、手話をやっていただいておりますけれども、市町村合併って手話でどうやるんだって思うんですね。これが市町村の市だそうですね。それで、町村の町はこうだと、都市はこう、それで村はこういう形で熊手の形になると。昔、村はご（枯れて落ちた松葉）を掻いて暮らしていたと。それだから、いまだに村はこうやっているんですね。それで、合併だから合併と。そういう手話をやっていただいているので、今日は大変いろいろな方々に参加していただいて、福祉のまちをつくらなければいかんと。それから、この掛川・大東・大須賀の人たちは11万5,000人にまとまるわけですが、11万5,000人は本当に健康長寿の人が多いいねと、こういうことですね。大東には東京女子医科大学があります。東京女子医科大学の技術だとか経験だとか、いろいろな介護の問題、看護の問題について、この新しい都市のレベルアップにきっと役立っていただけるんじゃないかというようなことを考えております。

とにかくこういう大きな世の中のうねりの中で、明治と昭和と平成の3回目の大きなうねりの中で、我々は幸せをつかみ、また住んでいるまちを誇りに思える、一緒になることによってもっと誇りに思えるまち、海と山と街道のクロスと言っていますけれども、海もあり山もあり街道というものもあると、そういうまちとして今日は公開討論会の始まりであると、皆さんが参加していただく始まりであるということで、よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

3 基調講演

○司会 それでは早速、基調講演に移らせていただきます。

本日のこの講演は、あちらにテーマが書かれておりますが「市町村合併とまちづくり」と題しております。静岡大学人文学部経済学科教授の小櫻義明先生をお迎えしております。

まず、私の方から先生のご紹介をさせていただきたいと思います。

小櫻先生は昭和20年生まれ、京都大学大学院を修了されまして、静岡大学人文学部講師、助教授を経て昭和63年から現職。専門分野は地域政策論であります。静岡県総合研究機構外部研究員、静岡県自治研修所講師、静岡地域学会幹事、静岡未来づくりネットワーク代表幹事など、あらゆるところでご活躍をなさっているようです。また、今回この掛川市・大東町・大須賀町任意合併協議会の委員としても参加をしていただき、また新市建設計画策定小委員会の委員長としてもお力添えをいただいております。

先生は、地域に関する学際的研究動向と、山間地での村おこしの実績を踏まえ

ながら、人づくりという視点から地域づくりに取り組んでいらっしゃるようです。

それでは、先生をお迎えしたいと思います。それでは、小櫻先生、よろしくお願いいたします。

○小櫻教授　ご紹介いただきました静岡大学の小櫻であります。

私、基調講演ということですが、今日はこの後のパネルディスカッション、市長、町長、お三人の討論がメインでありまして、私はその前座を務めるということですね。この1市2町の合併、それからまちづくり、これを巡って3人の首長さんの議論をスムーズに行われるように、合併を巡る基本的知識といいますか当たり前のこと、あるいは今どうなっているのかという、そういうことを少しお話しをさせていただいて、このパネルディスカッションの進行を進めていくという、そういう位置付けであると思っています。

そういう意味で、合併ということについて少し30分ほどお話しをさせていただくわけですが、合併というのは言うまでもなく、ここでいうと一つの市と二つの町が一つになるということですよ。これは要するに一つの市と二つの町が一緒になれば、新しい市長は1人なんです。だから、3人の首長さんがいたのを1人で済むと。更に、議会の議員の数も大きく減るだろうと。更に自治体の職員も三つの市役所、役場が一緒になれば、部長も3人いたのが1人でもいい、課長も3人いたのが1人でもいいという、そういうことなるわけですよ。だから、それぞれの市長、町長さん、あるいは議員さん、自治体の職員にとってみれば、いいことは何もないと。

にもかかわらず、何で合併するんだという話になるんですよ。すなわち私事を考えていたら、とてもこの合併という話には乗らないだろうと。にもかかわらず、あえて要するに首長の数が減る、議員の数が減る、職員の数が減る。だけど、合併をせざるを得ないという状況になっているという、このことの重たさですね。何で市長や町長があんなに合併、合併って一生懸命になるんだと。そういう思いを、少し皆さん方は真剣に考えていただきたいと思うんですよ。

皆さんのお手元に「市町村合併とまちづくり」という簡単なレジュメをちょっとお配りしていますけれども、大体合併という時に、真ん中に自治体の対応というようにあります。自治体で合併するかどうかということを考える時に、一つは基本的なものを右側にあります地域の実態、あるいは行政のあり方、まちを将来どうするのかという、そういうことを考えながら合併を行うんですね。

同時に、その左側に政府の政策というのがありますね。すなわち政府が、自治体が合併をする時に、要するに「やるんだったらおやんなさい」という態度になるか、あるいは「合併しろ」みたいな形で、思い切りお尻をひっぱたくような、そういうことをやるかということですね。そういう意味で、自治体というのはいわば政府の政策、対応を片方で見ながら、片方で地域の実態、行政の実態、まちの将来ということを考えながら決断をするわけです。

そして今日、言うまでもなく平成の大合併というのは、今正に行われつつある。

だから、そういう意味でも今回の合併というのは地域の実態、行政のあり方、まちの将来ということはもちろん深くかかわるわけですが、基本的には政府がかなり合併をしろという形で積極的にそれを促してきているという、そういう要因、きっかけが非常に大きいわけですね。

過去、歴史的に二度あった。すなわち一つは明治の初期における大合併、もう一つは戦後間もない時期の昭和の大合併という。そして、今日行われているのが平成の大合併であると。いずれも自治体の数を3分の1から5分の1程度まで減らそうという、全国的に大規模な合併の動きなんですね。

そういうのを見ていると、要するに政府が、あるいは国や県が「合併しろ、しろ」と厳しく言うから、自治体として、市長、町長として「しょうがないな」と思いながらも合併をするのかということになりますけれども。私は、何でこんな平成の大合併、政府が「合併しろ」と言っているのかという、この背景をちょっと考えてみる必要があるんじゃないかなと思うんです。

それは、いわばよく昭和とか明治の大合併と平成の大合併を同じようにやって、要するに国や県は何をしようとしているのかという、まず国や県考え方を示せとか、あるいは合併したとして大きければこれだけのことを準備しようだとか、そういう形で同列視してとらえる向きもあるんですけれども。私は、明治の大合併と昭和の大合併、それと今の平成の大合併は根本的に違うと。

どこが違うのかというと、明治、昭和とも日本という国をアメリカ、ヨーロッパに追いつけ追い越せ。いわば近代化、工業化。別の言葉で言うと富国強兵という形で、日本を近代国家に仕上げよう。あるいは、日本が戦争で負けてこれからは日本が経済で立ち直っていかなくちゃいけない。戦後復興、高度成長という、そういうことをやらなくちゃいけないという。それを国が先頭に立って引っ張っていかうというんですね。そのために、いわば市町村、基本自治体というものを国の手足のように効率的に動いてもらう、そのための合併であった。そこには正に、中央集権というものを強めるための合併という面が非常に多かったんですね。明治、昭和の大合併は。

今日の平成の大合併というのは全く違うんです。どこが違うかというと、中央集権とは逆に地方分権ということを促すための合併なんです。だから、そういう意味では、今回の合併も地方分権を進めるため、分権改革のための受け皿づくりとして、この合併というものが位置付けられているんですね。

更に、じゃあこの地方分権って何で今ごろ出てきたのかと。地方分権というのは昔から市町村や都道府県のもっと地方に権限をくれ、財源をくれという形で要求していたんじゃないかと。それがようやく実現したのか、そういう向きもあるんですけれども、私は今回の地方分権というのを、自治体が要求していたことがようやく実現したんじゃないかと、国の都合、もっと言うと国のあり方、国の形を考える中から提起をされてきたという。そこにもいわば中央政治主導型の分権改革だと思っているんです。

それはなぜかという、しかもこれは世界的な動きです。地方分権というのは。日本はもちろんそうですけれども、アメリカ、ヨーロッパにおいてもそうです。東ヨーロッパとか、あるいはアジアとか、中近東だとか、そういう国々においても同じように地方分権ということが大きな政治課題になってきているんですよ。

それはなぜかという、ごく簡単に言いますと、私は基本的には経済のグローバル化だと思っているんですね。簡単に言うと、国境という垣根がどんどん小さくなって、人・物・金、更に情報というものが自由に動くようになってくるんですね。そうすると、国境という垣根がどんどん小さくなって企業が国境を越えて自由に動きます。世界企業、多国籍企業という具合になってくると、もう国レベル、すなわち政治は国単位でまとまっているけれども、国単位で対応してもやっていけないもので、それではサミット、先進国首脳会議だとか、G7、G5だとか、あるいは国連だとか、いろいろな国際会議だとか、国際組織を使ってグローバル化した経済に対応しようとする動きがあって、それはレジュメのところにちょっと書いていますけれども、いわば今まで政府が持っていた、いわば国民国家、国民政府が持っていた権限というものが、国際的な機関、国際的な協議ということに委ねられているということですね。

と同時に、国境という垣根が低くなる、小さくなるということは、国境という垣根の中にある地域が、今までは何かあったら国が守ってくれた、国が助けてくれたと。ところが、このグローバル化がどんどん進んでくると、もう国では助けられなくなっている、守れなくなってくると。だから、今度は地域で自分たちで自立しろと。いわば人・物・金というのは、国境を越えて自由に出入りするわけですよ。そうすると、いわば地域がこれからたくさんの人を集めて、たくさんの企業に来てもらって発展しようとするならば、その地域で頑張らなくちゃいけないと。

それでは、地域を基本的単位にして、国際的な競争というものが非常に激しくなってくると。だから、地方自治体を今までは国の行政の末端機構で、国が作った政策を地域でいかに忠実に円滑に実行するか、そのことばかり考えていた自治体を地方政府として自立して、いろいろな権限を与えて、自分のまちをどうつくっていくのか、住民と連携しながらそれぞれの自治体で頑張ってみると。すなわち自治体が地方政府として自立を高めていけというんですね。これが簡単にいうと、地方分権なんですよ。だから、それには国から助けてもらえない。自分の力で何とか生き延びていかなくちゃいけないという。これが今世界的な規模で起きてきているわけです。だから、地方分権という動きが至るところで出てきているわけですよ。

そうすると、いわば地域としてどう自立するのか、国からの支援、助けというものがなくてどうやっていくのかというんですね。今までの日本の自治体というのは、そういうことを余り考えなかったんですね。要するに、税金というのも大部分が国税という形でパッと吸い上げられて、そして支出の段階になってくると

国から交付税だとか、補助金だとか、いろいろな形で降りてくる。だから、歳出面、すなわちお金を使える方だけで、もっと俺たちに自由に金を使わせろという形で分権を主張していた。だから、私はそれを歳出分権と呼んでいるんですね。

ところが、今ではもう国はとんでもない国家財政の破綻だと、地方を助けようにも助けられない。これからは地域で何とかしろと。すなわち歳入面において、どう地域が自立をしていくのか。歳入の分権ということを追われてくる。だから、もう国は地方の面倒を見切れない。いわば最低限の面倒を見ますよ。しかし、むしろこれからは地域が自己責任、自助努力で自立して地域をつくっていくべきだと。国はその側面からサポートするだけであって、今までのように何があってもナショナルミニマム、シビルミニマムという形で、国が手とり足とりと、いろいろな面倒を見るということはもうやめようという、そういう動きになってきているわけですね。

そうすると、いわば国内の地域で国からの支援なくして、そしてまたその地域における行政サービス、そのコストをその地域の住民の負担で賄うということが出来る地域がどれだけあるのかということですね。そういう意味で、こういう分権というものが具体的になり始めると、いわば小さな規模の自治体とか何かは「こんなはずではなかった、大変だ」という形で音を上げているわけですがね。だけど、今の国の財政の状況から見ると、国に今までのように頼ってすがって助けてもらうということはもう出来ないことは誰の目にも明らかだと。

そうすると、何とかやらなくちゃいけない。そうすると、すなわち都市でも大きな都市というものが自分の力で生き延びるだろうと。だけど、こういう地方の都市というのは生き延びられるのかどうなのかと。特にこの地域、中遠、東遠というのは、この1市2町もそうですけれども、いろいろな企業が高度成長期、あるいは70年代、80年代、外からやって来ました。だけど、外からやって来た企業が、今産業空洞化という形で世界の生産拠点、供給拠点というものがどんどん中国に移ってきている。だから、この地域に進出していた企業というものが、これから撤退をしてどんどん海外に、中国に移っていくかもしれない。そういう産業空洞化というものが、正に目の前に来ているし、既に始まってきているという。

そうすると、今までは工場が出来たから、その工場に娘や息子が働きに行って、父ちゃん、母ちゃん、じいちゃん、ばあちゃんが地域で農業をやっている。それで何とかやっていけたと。でも、そういう工場が出ていって、取り残されている農業だけで果たしてその地域が自立出来るのか。だから、今そういう危機に直面をしようとしているわけですね。

そうすると、これからは外に行こうにも行けない、外に移そうにも移せないという地域をつくるしかない。そうすると、単なるコスト、労働力の賃金だとかあるいは輸送費だとか、そういうコスト面だけの安いからという形でこの地域に企業を持ってくることは出来ない。むしろ中国に移せないのは頭を使った仕事、高度な技術、知識、こういうものを備えている企業というものがこの地域に定着

をすれば、この地域から撤退しようにも徹底出来ない。外に移せないということになるわけですね。

だから、そういう高度な知識とか技術だとかそういうものは都市というもの、都市機能、こういうものと密接につながっているわけです。だから、大きな都市は生き残れる。しかし、小さな都市はもっとより高次の都市機能というものを集積し、高次化、高度化することによって生き残りを図ろうとしている。そのための地域間競争というものが盛んに行われているわけです。

静岡県で言うと、静岡と浜松ですね。すなわち静岡県の中中部における中心都市と西部における中心都市が、地方の中核市というレベルから、より高次の地方中枢都市、そういう形にステップアップをしようと。そのために政令市ということになるという形で静岡と清水が合併して一歩先んじて、浜松がその後を追っかけている。だけど、静岡県の東部は三島、沼津という二つが分かれて、更に富士という形で分かれて、経済圏としては同じ規模だけれども、政令市というところまでなかなかいかない。だから、かろうじて10年後を目途にしてという、そういうことをようやく旗を上げたばかりの段階ですよ。

だけど、その次の中核市の下のレベルとなってくると、20万の特例市、地方中心都市という形になるわけですが。この地域でいうと、すなわち遠州全体の中心都市として浜松が政令市を目指していると。しかし、浜松は天竜川の西側にある都市であると。天竜川の東にある中遠、東遠の中心都市というものはどこになるんだと。そうすると、磐田があるじゃないかと、袋井があるじゃないか、掛川があるじゃないか。だけど、この三つの都市が、どちらが天竜川の東側の中心都市になるのか。そこで、競争が演じられているわけですね。

それぞれその競争で勝つために、それぞれが南北軸という形で先行的に合併をしよう。すなわち、横に東西に並んだ都市の競争をにらみながら南北に合併して、そして都市間競争の中で生き残ろう、生き延びようという形でしているわけですね。ただ、私はその時に南北で都市と農村というものがくっつくということの意味、意義、それは決して、いわば南北の農村からいろんなものを吸い上げて都市の中心機能を高めようという、そういうものではないと。

なぜか、というんですね。すなわち、これからの時代というのは知識、情報というものが非常に大きなウエートを占める、そういう産業、企業が中心になります。そうすると、頭を使う仕事、これが中心になるんですね。そうすると、豊かな自然環境、そこにおける豊かな農林水産物、新鮮で安全なそういう農業、自然というものが豊かに残っている地域、そういう地域にいろいろな高度な頭脳、知識、そういう担う人たちもそういう恵まれて豊かな自然環境、生活環境にあこがれてやってくる、住み着いてくる。こういう時代なんですよ。

だから、今、日本の中でもそういう地域、そういう地域で産業集積という形で注目されているんですけれども。例えば岩手県の北上だとか花巻あたりで、あそこに60年代から70年代出てきた工業団地、それがこの円高のもとで海外に転換し

ようとした時に、そこに勤めていた技術者が中国に行くのは嫌だと。よそに行くのは嫌だと。この地域がいいと。ここはすごくいい地域だと。住みやすいところだと。だから、会社をやめて、外に出て行かないでその地域に住み着いて、新しい事業、ビジネスというものを始めて展開をして、元気な地域というものをつくってきているわけですね。

だから、それを私は買っているんですね。今、大きな都市が生き延びるからといって、だから東京とか横浜とか名古屋だとか、そういう大都市の後をくっついていくだけで生き延びるわけじゃないんだと。むしろ地方都市は地方らしい、農林漁業、豊かな自然というものが残っている、そういうものとより高次の産業、企業というものをつなげていく。そういう豊かな自然環境、恵まれた生活環境、こういうものを大切に残していくということは、これからの21世紀の新しい都市であると。

私は浜松における浜名湖市、これは浜松の経済同友会を中心にした都市ビジョンの中で、その浜名湖市構想の策定委員会の委員長もやっていたんですけども、そこで浜名湖市構想をまとめたのも、正にそこなんです。すなわち、浜松が単に名古屋とか横浜の後を追いかけるんじゃなくて、21世紀の新しい都市を先取りをしよう。そうすると、一極集中ではなくて中心部分というものが複数ある多中心型の都市であると。更に浜名湖という自然を真ん中にして、豊かな自然環境、多くある農林漁業というものとハイテク産業、高度な情報産業というものを結びつけるような、それがこれからの新しい都市だと。

それでは、この中東遠における都市というのも、いわば都市というものをただ大きくし、そこに集中するのではなくて、むしろ南北に広がっている、隣接近接している農村というものを大事にし、そこにおける農業、林業というものを豊かに残していくと同時に、より高次の産業とそれを結び付けていくという、こういう都市というものをつくれば、これからのグローバル化、産業空洞化の嵐の中でも、この地域がちゃんと生き延びていける地域になるだろうと。

そういう意味で、合併というのは正に南北の都市と農村というものが結びつくことによって、そしてお互いの良さというものを生かし合うことによって、より良いまちをつくっていく。そのための道具であり手段であるのが合併であるわけです。だから、そういう意味では、私は合併というのは単なる道具であって、合併すれば放っておいてもうまくいくというものでもない。合併してもちゃんとお互いのまちのいいところを生かして、連携、協力し合わなければ、みじめな失敗に終わる可能性も高いわけです。そういう意味では、合併という道具を使ってどういうまちをこれからつくっていくのか。

そこで、いわば首長さん、議員さんの力量が問われると同時に、これからのまちは行政が、政治が主役でつくるのではなくて、市民が主役になってつくるものだ。行政主導から市民主導のまちづくりに転換をしないと、本当にいいまちは出来ない。そうすると、この1市2町の市民、町民の方々はお互いのまちのいい

ところということをお互いに認め合って、そしてつながることによってどう大きなまちに、豊かなまちに発展をしていくかという。

今までの経済理論というのは収穫逦増・逦減理論という形で、だんだん成長してくると伸び率、効率が鈍化するという理論でしたけれども、今ではむしろこの新しい知識、情報社会においては、収穫逦増の理論、すなわち1と2を足して3になるよりは、むしろ4、5という形で成長すればもっとそのまちが豊かになっていく、発展をしていくという、いわば収穫逦増理論というのが今日における大きな流れとして提起をされているわけですね。

だから、そういう意味でも私はこの1市2町というものがくつつく、そして、これは同時にどういう交流が生まれるかといいますと、すなわち1市2町が一緒になって、そして効率のいい行政サービス、すなわち今の行政規模でいうと例えば福祉あるいは環境だとか、あるいは産業経済だとかそれぞれのセクションで、より高次の専門的な力量、能力を持った職員、スタッフというのはなかなか育たない。それが大きくなることによって、そういう部門におけるプロフェッショナルというものをそこでつくること出来る。そして、そこに集中的にいろいろな事業とかそういうものも効率的に投資出来る。そうすることによって、少ない住民の負担の下で、効率のいい、レベルの高い行政サービスというものが提供出来るようになってくると。

そうすると、そういう地域には放っておいても人が集まってくる。企業は集まってくる。人と企業が集まれば、どんどん税収が増えてくる。税収が増えてくればより良いサービスというものが提供出来る。より良いサービスが出来るから、更に人と企業というものが集まってくるという、こういう好循環になる。これが収穫逦増です。どんどん大きくなっていく。

ところが、逆にいわば重い住民負担のもとでレベルの低い行政サービスしか展開でき得ないようなまちは、この小さな地域、まちというのは国境のように垣根を高くすることは出来ません。だから、住みにくいまちになれば人が出ていく。企業も出ていく。出ていけば、税収が更に落ち込む。落ち込むから、更に行政のサービスレベルというのは低くなる。低くなるから更に人が出ていくという、そういう悪循環に陥ってくるわけですね。だから、そういう意味でも今いい循環になっていくか、悪い循環になっていくか、その分かれ道に今この1市2町は差しかかっているわけです。

そういう意味では、私はこの1市2町の合併を契機に、どういうまちをこれからつくっていくのかと、そういうことにつきまして、この1市2町の首長さんのこれからのパネルディスカッションのお話、そこで市民の皆さん方に提起される問題、そういうものを含めて、ぜひこのシンポジウムをこの1市2町のまちづくりにとって一つの大きな転換期になるような、新しい出発点になるようなそういうものにぜひしていただきたいと思います。

ちょうど時間が参りましたので、これで私の話は終わらせてもらいます。

住民意向調査結果速報

○司会 小櫻先生、どうもありがとうございました。

それでは、続きましてパネルディスカッションに移らせていただきますが、これより準備をいたしますので、しばらくお待ちくださいませ。なお、このお時間を利用いたしまして、6月に実施いたしました住民意向調査の結果報告を紹介したいと思います。皆様にお配りいたしました資料の中に、結果速報がございますので、そちらをあわせてご覧ください。

この調査は、住民に意向を把握いたしまして新都市の建設計画に反映してまいりますことを目的といたしまして、実施いたしました。対象は1市2町にお住まいの20歳以上の方から無作為に抽出いたしました4,500人の皆様を対象に行いました。その全体の42.16%に当たります1,897人の方々から回答をいただきました。

主な結果をご紹介させていただきたいと思います。回答されました方の男女比は、男性が42.7%、女性が55.6%です。20代から80歳以上の幅広いご回答をいただいております。

問6、合併への関心につきましては「大いに関心がある」「少し関心がある」両方で7割の方が「関心がある」と答えていただいております。問7の合併で期待する効果といたしましては「役所の経費が節減出来る」が最も多く、続いて「今までと違った発想のまちづくりが出来る」が上位となっております。問8、合併への心配では「税金など住民負担が増えないか」が最も多く、続いて「中心部と周辺部に格差が生じないか」が上位となっております。問9は、現在の行政サービスに関する満足度が21の分野で示されております。グラフの左側から満足、右側から不満となっております。問10、新都市のまちづくりに積極的に活用すべきものは「福祉、介護施設のネットワーク」などが最も多く、続いて「1市2町を結ぶ幹線道路」が上位となっております。問11、新都市の望ましい姿では「保健・医療・福祉の充実したまち」が最も多く、そして「自然環境の豊かなまち」が続いております。問12、優先的に取り組むべき施策では「医療や福祉の充実を図ること」「バス・鉄道等の利便性の向上」が挙げられております。問11、問12いずれにおきましても、福祉・医療の充実に大きな期待が寄せられているようでございます。

なお、この住民意向調査結果速報につきましては、8月中旬に発行されます「合併協議会だより」にも掲載されますので、どうぞそちらもご覧ください。

準備の方はよろしいでしょうか。

4 パネルディスカッション

それでは、お待たせをいたしました。ただ今からパネルディスカッションに入らせていただきます。

まず初めに、皆様のご紹介をさせていただきます。コーディネーターは、講

演に引き続きまして静岡大学教授の小櫻義明先生にお務めいただきたいと思います。お願いいたします。そして、パネラーでございますが、こちらから大須賀町の伊藤徳之町長。お隣、大倉重信大東町長でございます。そして、榛村純一掛川市長でございます。

それでは、これよりの進行は小櫻先生にお願いしたいと思います。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

- 小櫻教授 それでは早速、パネルディスカッションを始めていきたいと思います。

一応順番といたしましては、まず大須賀町長から皮切りに大東町長、最後に掛川市長という順番で、最初にあいさつを兼ねましたシンポジウムへの期待あるいは臨む姿勢ということについて簡単に触れていただきまして、その後合併の必要性、それから1市2町のそれぞれが持つ資源と魅力、それから将来のビジョンという三つの柱につきまして、先ほど申し上げたような順番でそれぞれ語っていただいて、最後にまとめという形で一言ご発言をいただくという、そういう順番で行いたいと思います。

それで、一応パネルディスカッションは終わらせていただきまして、その後、会場の皆さん方からの質問ないしご意見というものも承りたいと思います。

それでは、最初ちょっとあいさつも兼ねて一言、大須賀町長からよろしくお願い致します。

- 大須賀町長 皆さん、こんばんは。ただ今ご紹介をいただきました大須賀町長の伊藤徳之でございます。今日は大勢の皆さんにお集まりをいただきまして、シンポジウムが開催出来ますことを大変うれしく思う次第でございます。

先ほど小櫻先生の方からお話しいただきましたように、現在全国的に市町村合併が語られ、またそれぞれの地域で特例法の期限でございます17年の3月を目指して進んでいるというのが現状だというふうに思っております。このような全国的な数がございますので、この合併はどのような合併をしたかということが、最後大変問題になるものというように考えております。

私どもも、今1市2町で進めておりますので、将来のこの地域の発展が更に向上出来ますように、いい合併をしたなというようになれるように、皆さんのご意見をいただきながら頑張っていきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

- 小櫻教授 ありがとうございます。

それでは引き続き、大東町長お願いします。

- 大東町長 どうも皆さんご苦労さまでございます。ご紹介いただきました大東町の大倉でございます。

ただ今前段、小櫻先生の基調講演をお聞きいたしまして、私どもも今まで心に描いていたこととは多少違うような形で、これから心を引き締めてこの合併に取り組んでいかなきゃならないかな、非常にそんな思いがしたところでございます。

今日のこのシンポジウムを通じまして、1市2町の皆様方がそれぞれ自分の持っている地域、また隣まちの持っている地域、それぞれの魅力を再発見をしてい

ただきたいと思っております。そして、その魅力を再発見したならば、それを訪ねていただいて、そしてまず活用をしていただきたいなと思っているところでございます。その上で、合併前ではありますが、それぞれの地域、またはそれぞれの団体がある程度のお付き合いが出来たならば、なお一層良い合併が出来るのではないかなと。そんなことを考えてまして、まず相互理解を深めていただきたい、こんな思いでございます。

以上でございます。

○小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、掛川市長、先ほどもあいさついただきましたけれども、なおまだ一言ございましたら、よろしくお願いします。

○掛川市長 今、両町長さんのお話ですが、掛川の場合に限りますと、掛川には海がないんですね。それで、海岸線がないんですね。砂浜がないんです。これは掛川のまちづくりや人間形成にとっては、日本は島国で海の国ですから、一つの弱点です。それをお二方を代表とする2町をお迎えするということは、非常にいいことだと私は思っています。

それで具体的に言いますと、大東町の海岸線と大須賀町の海岸線、海岸線を引っ張りますと1万200メートルあるんですね。1万200メートルということは、10キロと200メートルと、こういうことですね。この10キロと200メートル、それから厚さは計り方によりますけれども、砂地が仮に500メートルあるとすれば、それだけの大きな海岸線と砂浜があるというようなことになるわけで、この資産とか可能性とか、それから人間の大きな広がりには非常に大事なものであるというふうに考えております。

○小櫻教授 ありがとうございます。

掛川は海がないと。海がある二つのまちというのが非常に魅力的に映るということでしたけれども、この合併の必要性ということにつきまして、今度は海のある大須賀町あるいは大東町から見て、この合併の1市2町の必要性ということについてご発言をお願いしたいと思います。

それでは、伊藤町長お願いします。

○大須賀町長 先ほど先生の方からもお話しをいただきました合併の必要性のことなんですけれども。昭和の大合併から既に50年近くの年月が経っておりますが、私どもの県道も当時は砂利道でございました。それが現在はもう立派な舗装の道となりまして、また地域内の隅々まで現在は舗装の道路が、そしてそれぞれの町村を結ぶ県道あるいは国道等も立派なものになっております。

こんなことから住民の皆さんの生活圏というのも、もう大分広がりまして、毎日の生活の買い物等に関しても、一つ二つ市町村を飛び越えて向こうまで買い物に行っているというような状況が、昔とは随分変わった状況にあるというように思っております。もうこういう中で、5分かそこら走れば次のまちの役所があるというようなことが、果たして効率性というような面から見れば妥当なのかなと

というような距離の近さになってきているというようにも思います。

また、先ほどお話しいただきましたように、グローバルな時代で中央集権的なところから地方分権というような時代になりまして、ますます住民の皆さんのニーズが高度化してくる中で、法律は国がつくって県が読んで市町村が教えてもらうというような状況ではなく、自分たちの地域は自分たちの責任の下に、法律等の立案から最終の責任まで持つというような地方分権の時代には、やはり現在の規模ではなく大きな規模の拡大のメリットを生かした市町村の能力というものを高める必要があるのではないかとというようにも考えられます。

幾つかの合併の必要性はあるというように思いますが、そういうような効率的なこと等も考えていかないと、これから住民の皆さんの生活やサービスを守れないような厳しい財政の状況も出てくるというようにも考えておりますので、そういう面からも現在私どもは、合併は必要であるというように考えております。それらの解決は、今申し上げました通り規模の拡大等により、またアンケートでも皆さんから一番ご要望いただいております行政の効率化という面からも合併をして、諸問題を解決をしていくということが、現時点であるいは将来に向かって大切なことではないかとというように考えております。

幾つかありますが、私はその二つにつきまして皆さんに申し上げます。

○小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、大倉町長、合併の必要性についてよろしくお願いします。

○大東町長 ただ今伊藤町長のお話にございましたように、全く私も同感でございます。若干振り返ってみますとこの明治以降非常に人口も爆発的に増えてきたということがあるわけでございます。そして、特に都市へ都市へと人口が流入いたしまして、高度経済成長が到来したと、こういうことをまずしっかりと認識をしなければならないというふうに思っております。

同時に、非常に社会の発展、変革の中で、特に私どもは昭和のある時期まではほとんど自転車中心の生活行動でございましたけれども、これが完全に車社会になったということでございますので、それぞれ一人ひとりの行動半径が非常に飛躍的に拡大をしてまいってきたわけでございます。そんなことを考えますと、どうしても生活経済圏の拡大とともに、これからそういった地域づくりが必要であるというふうに考えるところでございます。

同時に、非常に少子化の時代に入ってきました。と同時に高齢化の時代でございます。高齢化率はそれぞれの行政がそうだと思いますけれども、年々高くなってきております。半面、出生率が非常に低下してきている。逆の現象でございますけれども、これらを考えますと、やはりそれぞれの行政の拡大は避けて通れない、こんなことも一つの要因になっていようかなというふうに考えております。

これらを頭の中に置いて、そしてこれからの行政づくりが必要であるという今の時点でございます。

○小櫻教授 ありがとうございます。

お2人の町長の方から、いわば生活圏の広がり、自転車が自動車という形で交通手段が変わったように、更に少子高齢化も含めて住民のニーズがより高度化し、行政の高い能力あるいは効率性が求められているという、そういうお話がありました。

掛川榛村市長の方で、お2人の町長の方からそういうご発言があったんだけど、それ以外掛川の方で見て、この合併の必要性ということについてご発言をお願いしたいと思います。

- 掛川市長 今、お2人町長さんのお話と、それから小櫻先生の基調講演、そういうものを勘案しながら、私なりに合併が必要性という形でなくて、みんな合併をやらなきゃならないとか、やらざるを得なくなったとか、何となくみんな一斉にブームみたいになっちゃったと、こういう理由は何だろうかということが必要性というものと裏腹ですけども、それを整理して申し上げたいと思います。

私は市町村合併、今言われているのは五つぐらいの市町村合併の必要性というか、理由というのがあると思うんですね。第1は、小櫻先生も強く指摘なさったように、日本の国も世界もみんな地域自立と、地方分権とか地域自立という地域のことは地域がやるべきだという風潮ですね。これが一つの根拠だと思います。地域主義としての合併。

それから2番目は、行政改革としての合併。今、国も県も市町村も少し借金が多過ぎるんじゃないかということを初め、もう古くさくなった制度が一杯あると。それで、もう企業だけが改革をやって、行政が一番遅れているんじゃないかと。市町村の壁が小さ過ぎるんじゃないかと。そういうことですから、行政改革としての市町村合併。そうすれば経費が大幅に節減されるとか、皆さんの寄せられたアンケートの市町村合併の効果の第1は経費の節減なんですよね。そういうことが二つ目。

それから、三つ目は大倉さんがおっしゃったように、少子化高齢化とか通勤の状況その他いろいろ新しい事実がうんと社会の方が先へ進んじゃっているの、そういう進んだ社会あるいは新しく対応しなきゃいけない社会現象に対しての新しい対応としての市町村合併と。これからは介護保険なんかやった時、健康保険もそうですけれども、いろいろなものが保険型社会になるわけですね。保険型社会になる時は、掛金を掛ける人が出来るだけ大勢いた方がいいに決まっているんですよ。だから、そういう意味では新しい対応としての市町村合併。

それから四つ目は、これは極めて短兵急な話ですけども、やはり日本の国はお上の言うのを聞く人が多いんですね。ですから、アメとムチとしての市町村合併と。アメとムチとしての市町村合併と言い過ぎかもしれませんが、アメ玉は何かというと交付税はそのまましばらく面倒を見ますよと。それから、この1市2町でいうと320億円ぐらいのお金を差し上げますよと。差し上げますよじゃない、お金を借りて何かやりなさいと。その場合の7割は政府が返してあげますと。7割返してあげるということは、7割補助ということですよ。7割

補助のお金をこの1市2町のまちづくりのために、10年間で300億円借款を許すということでしょう。それは大きなアメですよ。それでムチは、これから小さい町村の交付税はどんどん減りますよと。こういうことですね。だから、アメとムチに対応するものとしての市町村合併。

それで、これ五つ目は何かというと、そういういろいろなものをひっくるめて時代の声、時代の流れとしての見えざる手、誰が仕掛けたかわからないけれども、何となく日本全国がもう今どうしたらいいかという閉塞状態の社会の中で、市町村合併という言葉だけがもう非常にメッセージとして全国に広がっているんですね。今大きく日本が変わろうとしているその変わり方の中で、市町村合併が一番メッセージとしては徹底しちゃったと。これは誰が演出したというよりは、どうももしかしたら時代の流れ、江戸幕府の旗本8万騎が幾ら江戸時代の体制はいいと言ったって、明治維新でガタガタと崩れちゃったと。それと同じようなものじゃないかと。時代の声によって見えざる手、見えない手が働いていると、そういうふう思うんですね。そういう見えない手としての市町村合併。この五つだと私は思います。

今、掛川から大東町に通勤・通学に行っている方は約1,000人いるんですね。それから、大東町から掛川に働きに来られている方も約1,300人いるんですね。だから、もう1,000人位はお互いに行き来しちゃって働いているわけですね。そういうようなことですから、もう現に住民生活、市民生活は一体化していると、こういうふうに考えられます。その場合には1市4町が一番いいんですけども、合併の必要性を強く言えば1市4町になるんですが、今は残念ながらそうではないと、こういうことだと思います。

○小櫻教授 ありがとうございます。

この合併問題は初期のころは、なぜ合併が必要なのかという、そういう議論に終始していたんですけども、今はもう合併というのはある意味では当然の流れというぐらいになっていまして、むしろどういうまちをつくる、つくれる、つくるべきかという、だからこそこの合併というものはどうしても必要だというより高次のレベルの議論に移っているかと思いますので、そういう意味ではこれからのまちづくりということで、2番目のテーマであります1市2町が持つそれぞれの資源と魅力ということに移りまして、その中で改めて合併というものの必要性というものを浮かび上がらせていきたいと思います。そういう意味で、2番目の柱であります1市2町の持つ資源と魅力について、これもまた大須賀町長から順番にお願いしたいと思います。

○大須賀町長 資源と魅力の関係で、私が自分の町のことを余り言いますとちょっと手前みそになりますので、私から見た合併の相手の大東町さん、掛川市さんのことについて触れさせていただきます。

魅力、それはもちろん日本の国全体がそうありますように、東西軸をかねてからずっと日本の国は強化してきたというところがあるというふうに思っており

ます。先の昭和の合併の前の4町31村、その中で掛川町さんが現在の市になられているというような状況を見てみましても、やはり東西の、今度新幹線、第二東名まで入れますと、5大動脈が掛川市さんの都市的な機能、都市化に大きく力を発揮しているのではないかなというように、私どもは先の合併からのこの50年の中で学習をしてきたというような思いがいたしております。

そんなところから、今度の合併、先生からお話しいただきましたように、この地域、この付近を見てみますと、その東西の動脈に対して南北軸をとというようなイメージ、思いが強くて、ほとんど短冊状の合併というような方向で、今進められているというのが現状であります。これは、南北を強化したいというようなそれぞれの地域の思いが、こういう形になっているのではないかなというように考えております。

よって、私ども今回の合併にかける思いというようなものもそこに1点集約されるわけですが、掛川市さんの都市的機能を私どもの持っている田園的なまちとの融和を図ることによって、更に魅力のある地域になれるのではないかなというように、魅力として感じております。

先般、まちづくりの建設の小委員会が私どもの合併協議会の中には先生を委員長さんとしてありますが、1市2町のタウンウォッチングということで主要なところを委員の皆さん見せていただきまして、その反響は大変大きなものがございまして、私どももぜひそれらを勉強したいというようなことで、大東町さんの議会の皆さんが中心となって今度8月1日、私ども大須賀町としては8月5日にそれぞれのまちにご案内いただいて、更に魅力のあるところを実質見させていただいて、その意を強くしていきたい、またはお互いのいいところを見つけていきたいというような思いでありますので、どうぞよろしくお願い申し上げたいと思います。

○小櫻教授 ありがとうございます。

静岡・清水の合併の時に、私両市長を交えたシンポジウムのコーディネーターをやってしまして、その時に清水の宮城島市長が始まる前に、合併というのは結婚することだろうと、でも結婚相手、静岡から見て清水の魅力が何なのか、いろいろ話していても一向に出てこないんだよなんてぼやいていたことを思い出すわけですけども。大須賀町長の方で大須賀町から見た掛川、大東の魅力という、結婚相手の魅力ということについても語っていただきまして、特に南北軸というものの重要性というのは非常にあると思います。

そういう意味で、大倉町長、相手の魅力と同時に大東町にもこんな魅力があるんだよという、自分の町の魅力も含めましてお願いしたいと思います。

○大東町長 それでは、うちの自慢といいますか、こんな形のものがありませんよというようなことをちょっとご紹介いたしたいと思いますけれども。

いずれにいたしましても、1市2町というとそれぞれ近い中でございますので、ある程度は知り尽くしているかなと思いますけれども、まず非常に自然に恵まれ

ていると。これは大須賀町さんも全く同じでございますけれども、白砂青松の海岸線があるわけでございます。ここでは非常に波は荒いわけでございますけれども、ウインドサーフィンとか地引き網等は当然のことながら、非常に盛んであるわけでございます。

それから、小笠山山系でございますけれども、これは1市2町共通であると思っています。標高265メートルの小笠山からなる一連の山系、これは特に南側の緩やかな傾斜と北側の斜面、対照的でございますけれども、それぞれ植物も違いますし、自然の宝庫であると、こういうことも一つ言えるかなと思っております。

それから、もう1点、資源と魅力ということにもなりますけれども、うちのまちで特に誇れるものということになりますと、後ほど申し上げますけれども、非常に積極的に企業誘致をした中で、おかげさまで工業の製造品出荷額が、平成13年の資料でございますけれども、約3,020億円と。住民1人当たりの額にしますと、県内市の平均を上回る工業成績を誇っているわけでございます。業種も非常に多種多様で、非常にバランスの良い工業集積となっているかなというふうに考えております。

それから、もともとはうちのまちは農業のまちでございますして、農業総生産額でございますけれども、これも平成13年度には約51億円というようなことの中で、県内市町村の平均の約倍の実績があります。これは遠州灘の砂地を利用いたしましたいろいろなビニールハウス、温室の果物等、あるいは石川小芋とかニンジンとか、そんなことが非常に特産にあるわけでございます。

一方、商業でございますけれども、これも昭和60年に通産省の商業集積モデル事業の指定を受けまして、郊外型のコミュニティマート「ピア」というのを建設したことによりまして、非常に大東町の中心商店街が一つの核が出来まして、現在18年経過しておりますけれども、非常に活況を呈しているところでございます。素晴らしい発展をしております掛川市内の中心の核と合わせて、これから周辺の核ということで位置付けをしてまいりたいなというふうに思っております。

それから、施設の関係でちょっとご紹介いたしますけれども、これも先ほどお話が出ましたけれども、東京女子医科大学。ここの創設者が大東町の出身ということでございますので、これが縁でございますして、今それにかかわる教育機関の誘致を進めているところでございます。平成10年の4月に土方地内でございますけれども、これはちょっと掛川よりでございますけれども、看護学部が開学をいたしまして、同時に吉岡彌生先生の記念館も大東町に建設いたしました。これも若干控え室でお話し申し上げましたけれども、ここの館長さんは橋本さんという方で、この方は東京女子医大のご出身でございますけれども、現在日本女子医学界の会長さんをしておられますけれども、こんなことでいろいろなセミナー等も開かせていただいております。

これらは、これから合併の暁には特に掛川市民病院と連携をしながら、この地域の医療水準の向上に努められるかなと、こんなことも皆様方にもおつなぎをし

ておきたいと思っております。

それから、特に国際的な人物といたしまして、私どものまちから中国におきまして、周恩来あるいはそれ以外の有名な方々に日本語を教えていたという松本亀次郎先生という方がうちのまちの出身でございまして、東亜高等学校予備学校というのを東京に創設されまして、約40年間の間に2万人の中国人に日本語を教えた、こんなことも、うちのまちの一つの誇りでございますし、そういった歴史があるわけでございます。

この中に、特に北京大学の教授をされました汪向栄(ワウエイ)先生、これが松本亀次郎先生のただ1人の現存の生徒さんというふうに聞いておりますけれども、私どものまちにもたびたびいらしていただきまして、いろいろとご高説を賜っているところでございます。

それから、もう一つ申し上げておきますけれども、私どもの誇れる施設といたしまして、高天神城址というのがございます。これは戦国時代、今川、武田の存亡をかけて戦った舞台でございまして、この城址が残っているわけでございまして、これにつきましても鋭意保存に努めてまいりたいというふうに考えております。

それから、もう一つ施設でございまして、ついでに紹介させていただきますけれども、ここにも素晴らしい会館がございまして、大東町におきましても文化会館シオーネというのを創設をいたしました。特に近年、芸術・文化に対する関心が高まってまいりまして、いろいろな催しをさせていただいております。平成8年から10年にかけて建設をさせていただきました。若干施設は小さいですけれども、652席、非常に音響設備が良いという評価をしていただいております。非常に稼働率が良いわけでございまして、今日平均して98.6%の稼働率、ほとんど空いている日がないと、こんな状況でございまして、これからも合併できましたらお互いにこういう施設を提供し合いたいなと思っております。

同時にもう1点紹介させていただきますけれども、うちのまちでは温泉を掘削いたしましてオープンをしております。平成10年の秋に大東温泉シートピアがオープンをいたしまして、これは遠州灘の本当に海岸に面しております。地中海ふうの建物とともに露天風呂あるいはサウナ等も非常に繁盛しております。地元の特産品を販売する物産館も併設しています。非常に150号に近いというような形もございまして活況を呈しております。昨年度の年間入館者が約24万1,000人、1日平均にしますと800人ということで順調に営業をしております。これもこれから1市2町で一緒になったならば、一つ十分ご利用いただいております。これもこれからのまちづくりに貢献しているところでございます。

また、もう一つ名所といたしましては、菊川河口に潮騒橋というのかかっております。これは日本でただ1か所ということで、逆の橋というか吊床版橋ということで、普通の橋の逆の形でございまして、全長232メートルということでいろいろな方々に楽しんでいただいているところでございます。風力発電施

設もございますし、そんなことがこれからまちの一つの目玉としてご紹介していきたいなと、そんなふうに思っております。よろしくお願いいたします。

○小櫻教授 ありがとうございます。

大東町の魅力を思い切り語っていただきました。

引き続きまして、榛村市長にお願いしたいんですけれども、掛川の魅力、または切りがないと思いますけれども、1市2町のそれぞれの資源の連携というところまで含めまして、ご発言をお願いしたいと思います。

○掛川市長 今日お見えになっている方は掛川の方が多いと思いますから、掛川の自慢話を改めてする必要はないと思います。

しかし、新しい都市のビジョンと自慢話を兼ねて、この1市2町に合併が最終的に決まったらどういうことが言えるかというと、先にごあいさつで申し上げた通り、海、海岸線があって、こちらの上には1万ヘクタールの山があると。だから、海と山、そして真ん中に東海道本線、第一東名高速道路、新幹線と、それで国1バイパスという4本の大動脈、それから更に第二東名という5本の街道が通っていると。

ですから、海と山と街道のクロス効果、これの掛け算効果ですね、クロス効果。それで、南部に海岸線に150号線と、そういうようになると6本の街道効果があると。それで、クロス効果だけじゃなくて、掛け算効果だけでなく、それが浜松、静岡に10分、20分ということ、それが東京、名古屋に1時間40分、1時間とこういう関係ですから海と山と街道のクロス直結効果と、こういうことが言えるんじゃないかと、私は思います。

ですから、今、県内には売れ残った工業団地の敷地が多くて困っているんですけれども、掛川市は全部売れちゃったと。大東町もかなり売れたと。ですから、これからまた工業団地をつくった場合にも、この地域はそういうクロス効果、直結効果があるからかなり売れていくんじゃないかと、こういうふうに考えております。

それから、お2人もおっしゃったように、自然が豊かであるとか、農業が非常に多種多様な農業があるということは、これからの時代、21世紀のスローライフの時代、食の文化の時代には最も安心して暮らせる、最も喜んで暮らせる、最もおいしいものを味わって暮らせる、そういうところになるわけですから、自然と農業に抱え込まれた高次機能都市と、そういうビジョンが描かれるのではないかと、というふうに考えられます。

それから、大倉町長さんからお話しがあった吉岡彌生さんの業績に基づく東京女子医科大学の力、介護・看護に関する女医さんたちのその力を掛川市立病院やこの1市2町が持っている保健センター、その他合わせて予防医学のようなものをしっかり確立したら、ここは非常に健康長寿のまちに出来るのではないかと、というふうに考えております。

今、お医者さんが足りないとか、特に小児科と産婦人科のお医者さんがいないと。

それで、今のお医者さんのなり手はみんな大都市志向になったということですから、地方都市のお医者さんを確保するのは非常に難しくなっているんですね。だから、そういう意味からいえば、もう本当に2市6町にある六つの病院は合併して、本当にいい医療体制を築けば良かったんですが、これが五つに分かれちゃったということになる。

そうすると、今、浜松医科大学は何を考えているか。そうすると、中東遠と付き合う場合に、浜松医大は多分中東遠に対するお医者さんの配給は、どこか中核病院はどこだということを考えて配給をするということになると思うんですね。そうなった場合には、ここの1市2町の掛川市立病院と東京女子医科大学の勢力が一緒になって高レベルの病院をつくる方向にいったら、そうすればこれは、浜名湖大都市の浜松医科大学は、その外側の圏域では、この1市2町の市立病院が中核の医師の派遣所になると、そういうふうになると思います。

ですから、そういう意味で医学的に非常に重要なものを持つので、できるだけ新都市のビジョンを作る時には、大倉町長さんと一緒に東京女子医科大学の幹部の方に会って、そういう今後長期的な医師の布陣、配置というものについてしっかりしたものをつくっていかないと、このように思っています。

それから、伝統的なお話がありましたが、ここには3城あるわけですね。横須賀城、伝統のある横須賀城とそれから高天神城と掛川城と、その高天神城というのは、武田信玄の息子の勝頼、それから徳川家康が取ったり取られたりしたところなんですね。それで、「高天神を制する者は遠州を制す」と言われたお城なんです。だから、高天神を掛川市民も一緒に共有させてもらおうということは、遠州を制するというような昔で言えばそういうことだというふうに、私は思っています。

それから、もう一つ報徳がこの土地にはうんとあるんですが、この掛川と大東、城東をつなげる風吹トンネルというのがあります。あれは明治時代に本当に報徳のお金を借りて、入山瀬の人たち、城東の人たちが一生懸命つるはしで掘ったトンネルなんですね。それで、こんなになってトンネルを掘って、今バイパスができました、この間までトンネルがありました、あれは風がふっと吹くとシューッと、切り立ったトンネルですから、風吹とこういうわけですけども。

そのようなことで、旧道を、小笠山の資産を新しく空間として開発するというやり方と、自然を本当にうんと大事にするという、小笠山に対しては開発と保全と二つのスタンスをしっかり持ってやっていかないと。それで、そういう時に報徳思想というのが非常に大事な思想として、このまちの新しい都市のビジョンになっていくのではないかと考えております。

そして、掛川・大東15分、今30分かかるんですね。掛川・大須賀15分、それから掛川・大東10分と、そういうこのまちが南北に長細いまちになるわけですけども、それを青田のトンネルを切り通しにして、それで更にいろいろやっていると、大浜と掛川と10分、掛川と大須賀と15分ということになると、この町は丸く

なると。そして、その間を6本の大動脈が東西に通っているということで、自然を満喫しながら利便性も追求出来ると、こういうビジョンが描けるのではないかというふうに思います。

○小櫻教授 ありがとうございます。

はい、どうぞ。

○大東町長 今日、私ここへ来る時に、私は大東町の千浜でございまして、浜岡にほぼ接しているところでございますが、ちょうど車で計りながら来ましたが、この生涯学習センターに到達するのにちょうど25分かかる。今日は休みでございましたもんで、ラッシュの時間でないもんでしたから、若干時間がかかるなど。合併するにはもうちょっと10分ほど短縮せにゃいかんなど、そんな思いで今日ここに来させていただきました。ちょっとおつなぎをさせていただいておきます。

○小櫻教授 ありがとうございます。

それぞれその地域の魅力及びそのネットワーク、連携ということまで言及をしていただいたんですけれども、この1市2町というのは小笠山を境目に、いわば接していて、小笠山が接着剤になるんじゃないかなろうかと。そしてまた、掛川から見ると海がない。だから、海のある二つのまちと一緒になると。しかし、何でもう少し早く海に目を向けてくれなかったんだらうかという、そういう意味では私は、どうも掛川は小笠山に背を向けていわば街道からその北の山を見て、そして大須賀、大東はまた小笠山に背を向けていわば海の方を見ていたんじゃないかなろうかと。そういう意味ではある種の押しくらまんじゅうみたいに背中を向き合っていたのが、今ようやく背中と背中をくっつけて、そこに太い南北軸というものをつくっていこうという、そういう新しい時代に今差ししかかっているんじゃないかなというように思います。

そういう意味で、大須賀の伊藤町長、先ほども南北軸という形で語られていたもんですから、ぜひこの将来のまちづくりのビジョンについてご発言をお願いしたいと思います。

○大須賀町長 今、それぞれ皆さんから資源あるいはそれぞれの地域の魅力等についてお話があったわけですが、このような資源や魅力を持っているこの地域に対して、今後の住民の皆さんのニーズというものは、これも先ほどからお話が出ておりますけれども、産業あるいはそういうようなものを更に発展をさせていく時にも、学術的なあるいは学園的なというような方向も必要ではないかというふうに考えられます。また、医療・福祉等が非常に高度化しているところが、これから皆さんが魅力があるというところで住んでいただけるというようなところになるというふうにも思っております。

そういうような将来のニーズの方向からすれば、皆さんからもお話が出ておりますように、小笠山という非常に可能性、ポテンシャルを持った山があると。今まではどうも掛川あるいは私も大東さんと隔てるというような意味合いでございましたが、今度一つの市ということになれば、これらの利活用というようなも

のも先ほどのニーズを受けて、十分可能性が出てくるというふうにも考えております。

また、市長さんが言われております余りにも20世紀走り過ぎたということから、少しスローライフということで落ち着いた心を豊かにしていくような地域社会、あるいは私どもの生活のリズムというようなものを求められているというのも現状であります。

そういう時に、今、食の安全とかが言われる中で、私どもの海岸砂地というものは地産地消というような。地産地消街道ってどうかなというふうに考えておりますが、そういうようなお互いの顔が見えて安心が出来、スローな生活のサイクルが感じられる、そんな街道ではないか。また、そういうような海岸砂地の魅力があるのではないかとというように考えております。

これから、これからといいますか、学校も週休2日になりました。また、体験を重視した総合的な学習というようなものも取り入れられ、子供たちが真に自分の体験から生きる力というようなものも求められておりますが、そういうような子供たちの体験等の学習にも、この海岸砂地というのは大変素晴らしい魅力を持っているのではないかとというように思っております。

宿泊等の施設を造って、そしてそれぞれの海あるいは海岸のない地域の子供たちの学習等に受け入れていけば、春に植え付けに来て、中間に管理に来て、そして秋には収穫に、そういうような作物を組み合わせれば1年が巡り、多くの子供たちの力になれるのではないかと、そんなこれからの需要にも応えていける。

それにはやはり、今大倉さんからもお話しがありました、先生からもお話しがありました南北軸というものを実現することによって、そのような可能性が非常に浮かび上がってくるし、ニーズに応えていけるのではないかとというように思っております。

○小櫻教授 ありがとうございます。

引き続き、大東町長お願いします。将来のまちづくりのビジョンについて。

○大東町長 今、先生の方から提案がございました。この1市2町の資源を最大限に磨いた中で、美しいまちづくりがこれから必要であるというふうに思っております。そんなことに心がけていきたいなと思っております。

特に国土交通省でも、歴史や文化、風土など地域の個性を重視しながら、美しい国づくりを進めるということが言われております。そして、15の具体的な施策を盛り込んだ美しい国づくり大綱をこの7月11日にまとめたということで新聞紙上で知ったわけでございます。これが来年の通常国会に関係法案として提出されるというふうにも聞いておりまして、それぞれの自治体に取り組まなくてはならない美しいまちづくりがこれで実現していくのではないかなと、そんな期待もあるわけでございます。

それぞれ外国にはそういうところが既にたくさんございますけれども、我々もそこまで足を運ぶ機会はありませんけれども。いずれにいたしましても、人を

引きつけるようなそうしたこれからのまちづくり、そういった資源はこの掛川を含めてうちの大東、大須賀町にはたくさんあるというふうに思っておりまして、これは非常に勇気を持って、また張り合いを持って、これからそういったまちづくりが出来るのではないかと期待をしながら、それにも努力をしてまいりたいと、そんな考えであります。

○小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、掛川市長、よろしくお願いします。

○掛川市長 掛川市民の方々だから、ちょっとコーニングジャパンってご存じでしょうか。大須賀町にある一番大きな工場なのですが、私もアメリカのコーニング市へ行ってみたいなと思っているんですが、まだ果たせません。ガラスの工場だとか、その程度のことしか知らない人が多いですけれども、あの技術は物すごいもんですね。それが、今度この新都市の一つの新しい有力企業として、それからまた大須賀町の姉妹都市としてあるわけですから、大いに期待したいと思うんですね。そういう新技術が、さっき大倉町長さんが誘致した企業が多種多様な企業があるとおっしゃいました。それと掛川にもある。それ三つ合わせると、工業出荷額で1兆2,000億円になる。1兆2,000億円という工業出荷額って、もう農業田園都市じゃなくて工業都市のレベルですよ。全国でも40番以内に入っちゃうんですよ。だけど、そういうこともあるけれども、農業があるというところがいいところなんですよ。

もう一つ、大東町がさっきシオーネという話がありましたけれども、あのシオーネの文化会館というのはここの施設よりは立派なんですよ。席の数はこっちの方が多くは多いですが、質においては。何となれば掛川はヤマハの一番高級なグランドピアノ、1,000万円のピアノを1台しかないんですけれども、シオーネはそれが3台あるんですよ。それで、これはすごいもんだなと思ったら、自分で買ったんじゃなくて寄附してもらったって。だから、私も寄附をとるのがうまい市長だと言われているけれども、大東町の方がもっとうまいですね。そういう話があります。

それから地産地消でいうと、大須賀にサンサンファームとか赤ずきんちゃんとか、そういう地産地消、観光農業で典型的にうまくやっている人たちがいますよね。それは大東町も同じです。それで、もう掛川と大東、大須賀のイチゴだけで40億円ぐらいの売り上げなんですよ。お茶は100億円ですよ。だから、本当に工業出荷額で1兆2,000億円あって、農業もそうだとすることは、私は物すごいものだと思います。

それからちょっと裏話で、この今の大倉町長さんのお父様は、大倉重作さんという方ですが、この方は静岡県の町長の傑物の中の傑物で全村構造改善、大東町全部を全村構造改善やった方なんです。私が昭和52年に市長になりました時にあいさつに行ったんですね。隣の町長であるし、これからお世話になるし、大先輩としてあいさつに行った。そうしたら、何と言われたかといいますと、「とに

かく若い市長が出たんだからね、おまえさんとか行く道がみんなこんなになっているからね、これをパッと行けるようにせよ」と。それでないと、うちの町へ工場誘致、自分が工場を35社誘致したけれども、掛川へ行くと茶工場ばかりだと。うちの町が工業の工場が35社あると。今はそれから43社ですね。それだけ多様な工場誘致をされたわけですが、大倉町長にそう言われました。

それから、もう一つ言われたことは、掛川の姿勢はなっとらんと。青田のトンネルはぶち抜かなきゃいかんのに、あのまま小さなトンネルを掘っちゃった。それから、こっちへ来て今大倉さんに言われた渋滞してしようがないと言うけれども、上張のガード、あれがあんな狭いものつくって掛川の連中は南北の人たちをシャットアウトするつもりかと言って、あのガードがあいた時にあいさつで大倉さんが来て、そういつて言ったんですよね。それで、私には何と言ったかというのと、「若い市長が出来たんだから、もう少し目の覚めるようなことを掛川でやらなきゃ、俺たちは掛川に関係なくなるよ」ということを言われました。

それで、そのときの言った言葉で忘れもしないんですけれども、掛川の連中は多くの村々を一緒にしたもんで、奥から薪をしょって出て来る連中ばかり考えていると。こっちから海の幸と平野の米と豊かなものを持っている人たちを相手にしなきゃだめだよと。奥から薪をしょって来る人だけ、と言われたんですね。

私はそれは非常に強烈な印象だったですね。通せんぼうしやがったというのと、行く道がこんなになっているというのと、それから相手にしている人が違うんじゃないですかと言われた。確かに掛川町は多くと合併したわけですよ。だから、16村の奥の山間部と一緒にになったから、こちらの30村近いこの村々、小笠平野の幸と1万メートルの海岸線の海の幸とを相手にしなきゃいけないと、こういうふうに思います。

○小櫻教授 ありがとうございます。

最初にお話ししましたように、今日のパネルディスカッション、主にメーン、三つの柱で合併の必要性、それからそれぞれの地域の資源と魅力、更にそれをつなげた将来のまちづくりのビジョンという3本の柱につきまして、それぞれお話をいただいたわけです。

私は、この1市2町のまちをよく見ていて非常におもしろい、すなわち北に山があって、そしてその南に先ほど榛村市長が言われたように日本を代表する交通幹線というものがたくさんそこを貫いている街道が平野にあって、そしてまたその南に小笠山という山があって、そしてその山の南に今度は150号線、あるいはずっとそれを行けば海岸沿いの道路があって海があるという。山と平野と山と平野と海という、そういうものを南北に結びつけるのが1市2町だと。それには非常に異質な地域を一つにまとめるのが南北軸で、ある種のサンドイッチ型の都市というものになるんじゃないかと。

だから、そういう意味では、山と海、その間にある平野あるいは街道という、そういうものをどういう形で結びつけて、その中で相乗効果というのをどう出し

ていくかという、この辺がこれからの腕の見せどころということになるのではないかなと思います。

そういう意味で、今日正にこれから将来の新しいまちづくりの方向性というものが、この中で指し示されたと思いますけれども、まだまだ残された課題というのも多々あるわけですので、ここで最後にそれぞれの総括という形で、市長、町長さんにこれだけのことを言ったけれども、まだこのところを言えなかったとか、あるいはもっとこの点について会場の皆さんにも、市民の皆さんにも大いに考えてもらいたい等々ありましたら、ぜひ最後のご発言という形でお願いをしたいと思います。

それでは、これもまた順番で、大須賀町長の方からよろしくお願いします。

- 大須賀町長 内容的にこれからのまちづくりの中とはちょっとはずれるかもしれませんが、合併をする時に多分に出てまいりますのが、端っこが捨てられるんじゃないとか、大きなところと合併すると小さいところは込みやられちゃって、というような感情的なこと、情緒的なことがある意味で大変合併についてはマイナスのイメージになってしまったりということになるような気がしております。

そういうことから、私どものまちは一番小さい、どこと合併しても一番小さいというような内容でしたので、住民の皆さんには私はプラス思考で合併していく時に、そういうような感情論にとらわれるのではなく、将来のこの地域をどうするんだということをみんなで考えましょうということで、私どものまちは今まで住民の皆さんにお願いをしたりしてきたことであります。これからも合併については、被害者意識に陥らずに常にプラス思考でこれからのこの地域、私どものまちをどうするんだという議論を展開していきたいというふうに思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。

- 小櫻教授 ぜひプラス思考でこれから新しいまちづくりにということでした。

それでは、大倉町長お願いします。

- 大東町長 いろいろ申し上げさせていただきましたが、今日課題には上がってきませんでした。私は特にここに来まして非常に一つの大きな課題として受けとめているのが、高齢化の問題でございます。と同時に少子化の問題がございます。

うちのまちは非常に高齢化が進んできております。どこのまちもそうだと思いますけれども、特に男性の方々の平均寿命が79.9歳。大東町でございますけれども、男性でございます。これは県下で2番目で全国で9番目というような状況でございます。非常に喜んでいてときに、大きな課題だなというふうな受けとめ方をしているところでございます。

今うちのまちでは、老人福祉対策といたしまして老人施設、いわゆる今大東苑というのが1か所ございますけれども、これと類似した施設を建設する計画で進めてきておりますけれども。これは掛川市さんあるいは大須賀町さんも同じくだ

ろうかと思えますけれども、これもこれからの政治の大きな課題であるかなというふうに考えておりました、これにつきましては、またこれから一緒になりますもんですから、掛川市さん、大須賀町さんにもいろいろご指導いただきながら対応を立てていきたいなというふうに考えているところでございます。

それからもう一つ、特に榛村市長さんがスローライフシティというようなことで、「スローライフシティ掛川」というのを全国的に提唱されてきておりました、これは掛川といえばそういうことだというふうに全国でかなり知れ渡っていますけれども、これも確かにこれからの大きな課題であるというふうに、私も受けとめ方をしております。こんなことも一つ一緒になるまちとして、これからいろいろご指導をしていただきたいなというふうに考えております。

それから、今申し上げましたように、それぞれ1市2町にいろいろな魅力があるわけでございます。これをそれぞれ再度発掘をしながら、また再発見というような形の中で表へ出してきて、これからそれぞれの地域のまちづくりに添えてまいりたいなというふうに思っております。

こんなことを今日は提案をさせていただきまして、一つ今後ともよろしくお願いしたいと思います。

以上でございます。

○小櫻教授 それでは、榛村市長、最後の締めをお願いします。

○掛川市長 時間もありませんので、箇条書き的に3点言いたいと思いますが。一つは、全国的に言われていることですが、大きく合併すると身近な従来の市町村、小さい村だとか町が自治がなくなっちゃうんじゃないか、役場との距離が遠くなるんじゃないかと、そういう恐れを持っている人が非常に多いんですね。そういうわけですから、この掛川・大東・大須賀も丸くするとはいっても、やはり25分とか当分はかかるということになりますから、何か遠くになっちゃったというような感じを持たれてはいけないと。

したがって、大きい自治としての合併と小さい自治としての小学校区単位か中学校区単位に旧村的に、そこに一つの自分たちの主張なり問題なりをきちっと受けとめたり、あるいは場合によっては少し予算を持っていてそこでやっていくという、掛川でやってきた市民総代会のような住民参加方式をどういう形で1市2町としてもう一遍、住民参加の自治組織ですね、地域自治組織、今全国的に言われているのは地域自治組織と言われておりますけれども、市町村合併が終わった後の地域自治組織をどうするか。これが第1点の課題だと思います。

それから、次の課題は政策ビジョンをやはりしっかり出したいということですから、例えば健康・医療・福祉についてはこういう政策、それから環境についてはこういう政策、教育についてはこういう政策、それから産業とか観光についてはこういう、道路河川についてはこうというようなことで、しっかりしたビジョンを7本柱とかいう形できちっと出して、これが合併の効果だということを明確にこれから1年の間に繰り返してまとめていかなきゃいけないと。それが二つ目

のことです。

それから三つ目のことは、よく合併で吸収ということをする方が多いんですけども、確かに市会議員さんになって多分定員は30人か27人に設定されると思うんですね。そうすると、1,500票取らなきゃ当選出来ないと、そうなると大東、大須賀が何人かしか取れないとか、いろいろ議員の数が極端に偏っちゃうんじゃないかという心配をする方があるわけですね。

私はそれに対しては、確かに1回目はそういうふうになる可能性もあるんですが、掛川の場合だって同じことが言えるんですよ。掛川は1町16村が合併しまして16村時代のそれぞれの村々の村会議員さんはみんなやめになっちゃって、今の24人になっているわけですね。そのときに合併した自分の地盤というものが町村議会議員にはありますけれども、しかし、そんなことを言うとちょっと差し障りがあっちゃ申し訳ないですが、本当にこの市会議員さんは偉い人という人は自分の地域の代表の地盤だけのことを言う人じゃないです。やはり全市、掛川市全体のことを論じている人がやはりリーダーになっていくんですね。

だから、大東、大須賀の出身者は大東、大須賀のことしか考えない、掛川の出身の議員は掛川のことしか考えないんじゃないんですよ。どこの議員で出ても新都市は、新都市のことは、立派な議員さんだったら、おらのまちの利益代表者じゃない、新都市の全体の利益代表者だと、そういう見方で選挙人も選んで。だから、むしろ掛川の人には掛川の議員を選ぶんじゃないで、大須賀、大東から「こいつは」という人が出たら、それに投票すると、そういう時代が来なきゃ本当のいいまちは出来ていかないと、そういうふうに私はこれから声を大にして、議員の数が大東出身が何人になっちゃう、大須賀出身が何人になっちゃう、そういう発想はやめなきゃいけないと、こう思っています。

○小櫻教授 ありがとうございます。

お2人の町長、市長のご発言で全体のまとめにかえさせてもらって十分だと思います。ただ、非常に限られた時間ですので、まだ言い足りなかった、聞き足りなかったことも多々あるかと思いますので、この後会場の方からの質問、意見の時間もとっていますので、一応これでパネルディスカッションを終えまして、質疑の時間に移りたいと思います。

それでは、司会にマイクをお返しいたします。

5 質疑応答

○司会 小櫻先生、そしてパネラーの皆様、どうもありがとうございました。貴重なさまざまな意見をお聞きいただけたのではないのでしょうか。ありがとうございました。

それでは、質疑応答の時間とさせていただきます。できるだけたくさんの方々からの質問をお受けしたいと思いますので、お1人様1回限りにしていただきまして、また簡潔にご質問くださいますようお願いいたします。担当の者がマイク

をお持ちいたしますので、質問のおありの方、どうぞ挙手をお願いいたします。

それでは、お願いいたします。はい、どうぞ、真ん中の方。市町村名とお名前、そして回答をご希望の方、お名前をお願いいたします。ご起立いただいてよろしいですか。

○質問者 掛川の日坂の岩井といいます。

今、小櫻先生ですか、合併についてのいろいろお話を聞きました。そしてまた、市長さん、そして町長さんのお話を聞きまして、今まで合併、合併と言ったですが、どうもこれを聞いて非常に身近に感じているようなわけですが、

これから新しい市になった場合、市民の一体感をつくるといいますか、それにはやはり1市2町の住民交流が非常に大切ではないかなと思います。そういった中で、現在こういう計画をお持ちか、あるいはご検討されているかということですね。市長さん、そして町長さんにお伺いをしたいと思います。

○司会 他にもご質問のおありの方、いらっしゃいますでしょうか。まとめてご質問を受けたいと思います。

はい、真ん中の女性の方お願いいたします。市町村名とお名前をお願いいたします。

○質問者 掛川市の田川と申します。よろしくお願いいたします。

先ほど資源と魅力について町長さん、市長さんからお話がありましたけれども、小櫻先生はいろいろな地域の実情をよく把握されていると思うのですが、この地域が他の地域と比べて特に劣っていて、合併後特に力を入れていかなければならないようなことがあれば教えていただきたいと思いますけれども、よろしくお願いいたします。

○司会 それは小櫻先生にお願いするご質問でよろしいですね。

他にはいらっしゃいますでしょうか。はい、こちらに。

○質問者 私は掛川で農業を営んでいる遠山といいます。

全体のことで、どなたにお答えをいただいても結構ですけれども、1市2町で合併をされるというお話、また趣旨についてもそれなりの理解をさせていただいた、非常に勉強させていただいたという思いがあります。また、大倉町長も言われましたけれども、また本日いただいたリーフレットにも記入してございますが、少子高齢化が非常に進んでいく、その時にこれから先この合併の機会を逃すと、次には対等合併はまた50年ぐらい先になるだろうと、そんなふうにも言われています。その時には、日本の人口は更に減少しているだろうと。当然1市2町で合併が行われても人口は減る可能性がある。その時に理想とする人口はどのぐらいの人口が適当であるのか、また増えることが望まれるのか、可能性があるのか、出来ることであれば私としては1市4町が合併出来ることがありがたいなと、そんな思いでもいるということ、またあえてお伺いをさせていただきたいと思います。

○司会 はい、ありがとうございます。

他にはいかがですか。はい、それではもう一方。

○質問者 掛川の望月でございます。

1市2町の合併ということを前提にいろいろお聞かせいただきまして、特に皆さんの意見については私も十分な理解をしたわけでございますが。1市2町という最低規模の合併の下での、先ほど来ありました総論的には分権と自立とか、行政改革、法律の云々とか、社会構造の変化とか、あるいは具体的には海と山と平野の異質な資源の相乗効果を出すという大変難しい課題を抱えている中で、最低規模の1市2町という体制の中で具体的にそれを当面の山を乗り切るのは、私は行政能力だろうと思います。とりわけその市の職員の資質というものが、大変大きな役割を果たすのではなかろうかと思います。

そういう意味で、その人材の確保あるいは養成というものをどういうふうにしていくのかというようなことについて、お伺いをさせていただきたいと思います。

もう1点は、1市2町に関連しまして、最低規模であるだけに合併後の隣接の市との連携というものについてどのようにお考えを持ってられるのか、その辺も含めてお伺いいたします。

以上です。

○司会 はい、ありがとうございます。

4名の方にご質問いただきましたので、それでは小櫻先生の方からお願いしてよろしいですか。

もう一方、よろしいですか。それでは、こちらの方で一応締めさせていただきたいと思いますので、もう一方お願いいたします。

○質問者 掛川市に住んでおります倉島といいます。

先ほどの方もいろいろ言われたと思いますけれども、私もここに浜岡町、袋井市、菊川町、小笠町といたないのが寂しくて仕方ありません。1市2町でやっていくということでしたら、それも仕方ないかなと思います。各市町村の言い分はそれぞれあると思いますけれども、こういうことはもう人口とか世帯数というのは、現実的に動かしがたいことです。やはり人口20万人以上ぐらいの都市が、私個人としては大変いいじゃないかなと考えております。先ほど言った町や市の考えがちょっと余りわかりませんし、先見の明がないなと私は思っております。それで、1市2町ではどうも少ないような気がしますけれども、これでやっていくということでしたら、どのようにやっていくのか、私も見守っていたいと思いますけれども。各市町村さんは頑張っていたきたいと思います。

○司会 はい、5名の方々からいただきましたけれども、よろしいでしょうか。

それでは、お願いいたします。

○小櫻教授 それでは、5名の方のご質問、ご意見に対して、私の方から少しコメントをさせていただきます。

総括的に、このご発言に対してというわけじゃないんですけれども、将来これから魅力的なまちをつくる時に、私は魅力的なまちは個性的なまちでなくてはい

けないと。個性的なまちというのは、ある機能に特化することだと。すなわち住宅地であれば生活環境というものの整備に徹底的に力を入れる。商業地域であればお客さんがたくさん来るような、そういう集客機能、商業的な空間として魅力ある地域、あるいは工場地域であれば働きやすい環境、あるいは交通アクセスとかそういうものを整備すべきだと。

そういう意味でもまちづくりというのは、より個性的なまち、そうすると個性的なまちというのは非常に小さな区域になるわけですね。そして、その個性的なまちづくりを住民参加、市民主導で進めていく、しかし、個性化をすることは機能に特化するわけだから、自立出来ないわけですね。自立しようと思えば、住宅地と商業地、あるいは工場地域というものがお互いに密接に連携しないと自立出来ない。だから、広域的に連携をする必要があると。

だから、私は広域合併をすることは同時に、先ほど市長、町長の話にもありましたように、より小さな生活圏、小学校区、中学校区レベルにおける住民参加と個性的なまちづくりを強めることであって、その両方を両立しないとこの地域というものは発展しないだろうと思うんですね。

そういう意味では、私はこの地域で欠けている、物足りないというのは、やはり新幹線が停まる駅でありながら、もう少し掛川の中心部分にいわばより高次な都市機能とか、あるいは集客施設とか、特に学術情報研究開発、そういうものがやはり欲しいなと。ただそれは、私は小笠山という、大東、大須賀、そこと絡んだあの空間、あそこは正にスローライフとして最もいわば人間らしい暮らしができる場所であって、ああいうところで新しい知的情報というものを創造・発信出来るだろうと。

だから、そういう意味では1市2町と一緒にあって、その接着剤である小笠山というものをどう利活用し、それとこの掛川市における高次都市機能というものの、それといかに結びつけていくかということが課題だろうと思います。

それから、人口につきましては、私は日本全体の人口が減っていくわけだから、むしろ量より質だと。だから、そういう意味ではどれだけたくさんのかではなくて、どれだけレベルの高い市民が住んでもらえるかどうかという。それともう一つは、定住人口だけにこだわらず、交流人口あるいは集客人口、すなわち定住している人はこれだけだけれども、こんなにたくさんの方が来てくれる。そういう魅力ある地域というものの、これをやはり目指すべきだろうと思います。

そのために、私は人材の育成としても、これは以前から言っているんですけども、人材放流、すなわちここで育った子供たちを外に出してこのまちで何ができるかという問題意識を持って世界を旅して、そして答えを見つけた子供たちがこのまちに帰ってくる。だから、そういう意味でも子供たちが将来大きくなって、自分が家族を持った時に再びこの離陸した土地に帰ってくるような、そういう子供たちに選択してもらうような魅力あるまちをつくらなくちゃいけない。そのためには、いわば人材放流という形で外に出すと同時に、すぐれた才能・能力を持

っている人材を誘致すると。そして、この地域の中で新しい独創・創造、そういうものをしてもらって、それをこの地元の子供たちが取り囲んでそれを見守っていく。その中で教育というのが出来るんじゃないか。そういう意味では、人材の放流と人材の誘致というものがこれからの大きな課題ではなかろうかと思います。

それから、組み合わせの問題ですけれども、私は合併という組み合わせの問題とどういう都市をつくっていくかということは密接に関連しながら、同時にいわばつながっていくものであると。だから、そういう意味では1市2町というところから出発していますけれども、この1市2町でちゃんとした南北軸をつくって魅力的な空間をつくれば、東西の市や町がいわばそこに引きずられて入らざるを得ないという、そういう魅力ある1市2町をつくるということがまず第一であって、そこに私は当面の力を注ぐべきだろうという具合に思っています。

これは1市2町の町長さん、市長さんもそれぞれお考えがあると思いますので、私の意見は以上のことにさせていただきます。

○司会 はい、ありがとうございます。

それでは、伊藤町長の方からお願いいたします。

○大須賀町長 5人の方から質問いただきましてありがとうございます。

最初の方のことなんですが、これから新市の一体感としての交流ということなんですが、これは今小櫻先生もお話しいただいておりますように、ハードの部分で南北軸とかというようなハードの部分と、新市がそれぞれの行政体の中である現在の、自治連合会とかという私どもの方では呼んでおりますが、そういうような人のつながりの場を積極的にもっていくことになるというふうに思いますので、積極的に皆様方からも参加をしていただければ、交流とか融和とかというのはかなりの短時間で達成出来るのではないかというふうに思っております。

それから、2番目のこの地域に劣っていることということですが、今先生からお話しをいただいたようなことだろうというふうに思っております。1市2町が合併をし、将来の少子高齢の中で更に減るのではないかというふうに言われておりますが、これから、幸いにも現在のところ他のところと比べて魅力がある、あるいは雇用がある、いろいろなことから人口がこの地域増えているというのが現状ですが、これからは日本全体が減っていくということです。国の政策で外国とかいろいろなものとのつながりをどうするのかというようなことで変化はありますが、減るというのが将来の見方だというふうに思っておりますので、先生からお話しいただきましたように、定住のみならず交流等の人口も十分加味していくことがこれから必要ですし、また減るという状況ならば質よりも量というようなことも、やはり考えていくことが大切だというふうに思っております。

4点目の1市2町が現在前提とするならば、言われていた理想よりも最低規模の合併ということではありますが、この中で行政効率等を求めていく時に特に心配されるのが、職員の皆さんの資質だということでございますが。これらも規模の拡大をすることによって、行政の中に職員の研修等の専門職を置くというよう

な人的な余裕も出てこようというように思っておりますので、現在では出来ないような職員の研修とか質を高めることも、その新市で出来ていくというように思いますし、また県と国との結びつきの中で職員の研修等も更に活発にしていくことが出来るというように思っております。

また、合併後の隣接の皆さんとの付き合いということですが、関係ということですが、これは今まで一部事務組合等を近隣の町村さんとともにやってきたものについては、中の組み合わせといいますか、五つのものが二つになったり三つになったりということはそれぞれの合併で変わりますが、住民の皆さんの生活密着のサービスについてはどんな合併になろうとも揺るぎないと言ったら語弊がありますが、現在と変わらず更に向上をしていくものというように考えております。

五つ目の袋井、浜岡さん、小笠、菊川さんがここにいないのが寂しいということですが、誠にその通りだというように、ご指摘の通りだというふうに思っております。私どもも20万人以上の都市というものを一つの理想と掲げて、経済界の皆さんもご支援をしていただきましたが、住民の皆さんの住民発議というような民主主義の手法を駆使して、現在まで来た経過がございます。

しかしながら、それらも2市6町、1市4町というようなものも、私どもは常にそうありたいということで理想を求めて賛成をしてきたものでございますが、やはり結婚というようなものと似たようなところがございまして、私どもの理想だけでは相手にオーケーを出していただけないと、合併というものは出来ないということでありますので、現在の状況まで来るに至った経過等を思い浮かべながら現時点で思いますことは、それぞれのまちにそれぞれの歴史をバックに育んできた民主主義というものがあって、その民主主義が現在の合併のありようというものについて、現在のような枠組みといいますか、そういう方向でそれぞれのまちが考えられた結果だと、熟慮の結果だというように考えるしかないのかなというように思っておりますので、よろしくお願いします。

○司会 ありがとうございます。

それでは、大倉町長お願いいたします。

○大東町長 今、伊藤町長さんがお答えになった通りで、ほとんどそういうことに変わりはございません。特にこの1市2町でやっていくのか、それは動かしがたいことかというようなご質問ございましたけれども、これは私もそうございましたし、伊藤さん、それから榛村市長さんもそうであったと思いますけれども、理想としてはやはり人口的には20万人ぐらいの人口というものを目指してそれぞれ努力をしてきたところでございますけれども。残念ながら、それにつながらなかったということでございます。

本来、ほとんど同じような歴史の中で過ごしてきた小笠郡、掛川市でございますので、これが本当は理想的には固まったのが一番であったわけでございますけれども、なかなかそういうわけにいかないのは合併であるかなというふうに、つくづくそんな感じが今しているところでございますけれども。この段階に至りま

しては、榛村市長さんはまだまだ努力の必要があるというふうに私には言っておりますけれども、私はそれぞれの地域といいますか、それぞれの枠組みのところの方々の意見も尊重をするべきではないかなというふうに思っております。

そうした中で、私はこの1市2町が将来的には近い将来においてよそがうらやむような、そういったまちづくりにまず専念して努力すべきではないかなと、今そんな考えに至っているところでございます。どうかそういうことでご理解をいただいて、素晴らしいこの1市2町の地域を構築をしていきたいと、そんな決意でおりますのでよろしくお願いしたいと思います。

○司会　ありがとうございます。

それでは、榛村市長お願いいたします。

○掛川市長　今、大倉さんは、もうここまで来たら相手を尊重して1市2町のこれこそいいんだというものを早くやった方がいいというご意見になっているんですね。ところが、この方は1年前は全然違っていて、やはり1市4町だとか小笠郡だけでやれとか、全然もっと広くやれと言っていた方なんですけれどもね。

私はまだいまだに1市4町でいくべきだとこだわっているんですけれども、相手のあることですから、やむを得ないということもあるし。それから、伊藤さんの立場も、もうそんなに嫌だ嫌だと言っているところに無理やり入れていったって意地をするだけだ。やはり自分たちは自分たちで早くやった方がいいと、ということですから、私もこの2町の町長さん方がおっしゃることに従わなきゃいかんかなと、いつまでも1市4町にこだわっていてもだめかなと、こう思っています。

それから、ご回答の皆さん全体に対して私は謝らなきゃいかんと思っているんですけれども。要するにいろいろ一生懸命やってきたけれども、やはり袋井にしても他のまちが全体として掛川に警戒感を持っているとか、あるいは掛川が一人勝ちみたいになってきたじゃないかということに対して、掛川と一緒にすると損しちゃうじゃないかというような印象を与えていたということがあると思うんですね。それは私は不徳のいたすところで、みんなが掛川市が良くなった、それじゃそれについてこうじゃなくて、1人だけ勝ちやがってとって離れていっちゃうというような形に結果としてなったということは、申し訳なかったなと思っています。

それで、時間の関係ですから一言ずつ申し上げると、私は今日お見えになっている方は掛川の方がほとんど多いと思いますから、要するに後1年余裕がありますね。これからの新しいビジョンをつくるのに。来年の4月1日が市制50周年、掛川市が出来て50周年なんですよ。だから、50周年記念事業をやりながら、いいものは新しい都市に持ち込んでいくと。悪いものはもう片付けちゃうということ。

というようなことで後6か月と、それから50周年を挟んで後6か月。合計で1年余裕がありますから、今年の市民総代会でも新都市のビジョンを中心に50周年記念事業をしっかりと議論して、これで市民もみんな頑張って50年やったんだと。

そうしたら、結構いいまちになったねと言えるようなふうにもっていく中で、新都市ビジョンを決めていくようにしたいというふうに思っています。

それから遠山さんの質問ですけれども、人間の数でいくと確かに人口8,000万人ぐらいになっていくわけですね。しかし、私はこの地域はもっていき方によっては人口は減らないと思っているんですね。まだ当分増えると思います。ですから、その点は日本の中で一番恵まれている地域ですから、その点は皆さん自信を持ってやっていただきたいと思うんですね。

それから望月さんの質問の人材確保は、確かに東京大学、別に東京大学がいいというわけじゃないですけれども、東京大学法学部を出た国を牛耳っているような法学士はみんな霞ヶ関へ入っているわけですよ。それが霞ヶ関へ入るよりは、地方都市のこのまちへ入った方がいいというようになるには、やはり人口40万人とか30万人の中核市以上でないといけません。

だから、小さなまちだったということは人材確保力は非常に衰えるわけですが、しかし、そこにいる人たちの中にしっかり磨きをかければ立派な人たちは一杯いるわけですから、これは私は十分人材は確保されていくと、こう思います。

隣接市との付き合いについては、もう袋井と掛川は太田川については切っても切れない関係ですし、それから焼き場についてはもう菊川とは切っても切れない関係ですし、いろいろ全部広域行政でやっているわけですから、これは隣接市とはうまくやっていけると私は思います。

問題は、それじゃなぜ菊川は4万7,000人で市になるのか。浜岡は3万5,000人で市になるのかというのは、気心の知れた、小回りのきく都市をつくれればいいという考え方ですね。私たち1市2町は最初から中東遠でいくべきだと、そうでなければ2市6町という案を言っていたんですね。それはもっと地方分権に合わせて大きな自治をつくって、大きな自治体をつくって県は要らないよというような形で自治二層制を一層にして、そのかわり小学校区単位に小さな自治をつくると。小さな自治と大きな自治をつくるという立場で地方自治を確立すると、こういう意見だったわけですね。

ところが、小さくても市になればいいという立場だと、それは要するに大きい自治論と小さい自治論はないんですよ。一つの小回りのきく、当分この10年間だけの様子を見ると、こういう立場ですね。ですから今、島田も榛原郡で大井川の奥までやるかどうか、私は中川根町長と本川根町長と2人とも親しいので、彼らはいつも私に相談してくれるんですけれども、大井川の奥の2町は二つ合わせても1万人ちょっとしかない。1万人しかない。だけど、この山々を守るには俺たち以外下流の人たちにわかるもんかと。だから、小さな自治でいいんだと、小さな自治体でいくんだと、こういうことで独立しようとしていますよね。

だから、そういう意味では今後やはり妥協案の小さな都市になればいいということと、大きな都市でいくべきだというのはあくまで二つの路線があって、こ

こでもう大倉さんの忠告に従って決着をしなければいかんと、こう思っていますけれども。今日のところはやむを得ざる１市２町案というふうに、私は思っています。

○司会　ありがとうございました。

それでは、以上で質疑応答を終了させていただきたいと思います。それでは、小櫻先生、そして３名のパネラーの皆さん、どうもありがとうございました。どうぞご退席ください。

6 閉会

皆さん、本日は長時間にわたりましてお付き合いくださいましてありがとうございました。どうやら本日は掛川市外からお越しくださった方々も何名かいらっしゃるようですが、本日のこの掛川市民の意見を聞きたいということで、この掛川市にわざわざ参加してくださった方がたくさんいらっしゃるようです。この後８月２日、そして８月１７日にも大東町、大須賀町におきましても、合併シンポジウムが行われます。どうか掛川市の皆さんは、今度反対に大東町、大須賀町の皆さんがどんな思いでいらっしゃる、そしてどんな質問をされるのかということをお聞きに参加されてはいかがでしょうか。本日を機会に、また地域や家庭でこの合併について討議をしていただきたいと思います。

本日は、本当に遅くになりましたけれども、長時間お付き合いいただきましてありがとうございました。どうかくれぐれもお気を付けてお帰りくださいますようお願いいたします。本日は誠にありがとうございました。

閉　会　　午後９時２０分